2021
vol.37
Aug

黄河の森
KFG

発　　行／特定非営利活動法人
黄河の森緑化ネットワーク
常務理事・事務局長／矢 野 正 行
編集責任者／小 川 良 太

〒650-0011
神戸市中央区下山手通り2丁目12-11
神戸華僑会館内
TEL・FAX:078-392-8328
E-mail:kouganomori@s6.dion.ne.jp
URL.http://www.kobe-chinese.com/kouganomori
ＩＰ:05031111874

植樹作業に集まったオトカ前旗の村の人々（５月）

ああ あの大河 太古より 流れる誇り
ああ その緑 永久に たやさぬ心
燃えたつ生命 ここに ここに

CONTENTS

P.2　事務局からの報告「第18回総会と2021年度活動」
・「2021年５月オトカ前旗での植樹状況」
オトカ前旗植樹事業点描
P.3　庭木の健康診断 25
絵本からのメッセージ 32
P.4　歴史の中の人と植物
「くり」を食料・建築材と活用した縄文人

事務局からの報告

第18回総会と2021年度活動

事務局長
矢野正行

第１８回通常総会は、昨年に引き続きのコロナ禍のため、通常の開催は断念しました。議案書の提案・議決は郵便によることとなりました。６月１日に理事１０名の出席のもと総会兼理事会を開催し、郵送により寄せられた会員の議決書の確認を行いました。そして、２０年度決算・２１年度事業計画書が賛成多数により承認されました。

昨年度は例年の活動ができない中で、活動は理事会の開催・会報の発行と限定されたものとなりました。国外事業としてはオトカ前旗の９年間実施した、植樹地の管理－防疫のための資金援助は継続しました。２１年度の事業は日中友好会館の助成を得られたため、オトカ前旗での事業を再開できることになりました。ただ国外事業については、現在の状況下では現地に赴いての協議・植樹参加ができないことが予想されます。国内事業の実施についても、会員の皆様の参加を得ての実施は困難と予想されます。

このような情勢の中でいつも通り会員の皆様からは、会費・寄付金を寄せていただいていることに感謝を申し上げます。

【2021年5月オトカ前旗での植樹状況】

２０２１年３月に日中友好会館から、『黄河の森緑化ネットワーク』の「オトカ前旗での植栽緑化事業」が助成対象に選ばれたとの連絡がありました。当ＮＰＯでは、一昨年まで９年間行って来た日中交流基金の助成事業と同じく、現地オトカでの公安局による事業認可は不要と考えていたのですが、２０１７年に中国では「ＮＰＯ管理法」が施行され、海外ＮＧＯ（ＮＰＯ含む）が中国国内で活動を行う場合、現地公安局への届出が義務付けられており、「オトカ前旗での植栽緑化事業」も届出対象事業となり、そのためオトカ前旗公安局への届出を行い、当局の発行する「受理書」が必要となりました。

このため５月下旬、カウンターパートの「オトカ前旗婦女緑化協会」に対し、早急にオトカ前旗公安局へ事業の届出を行い「受理書」を取得するよう依頼しました。ところが届出には「オトカ前旗婦女緑化協会」の銀行口座が必要とのことで、この作業に手間取り７月末の現在も「受理書」が取れていない状況です。

このような状況下では、日中友好会館募集の２０２１年度助成事業「日中植林・植樹国際連帯事業」への応募は難しいが、２０２０年度助成事業の中間報告を９月には行う必要があります。また現地の植樹生育状況写真と報告書類をそろえる必要もあります。コロナウイルス蔓延のため、国内においても充分な打合せが出来ない状態では、中国オトカ前旗を訪問することは出来ないため、オトカ側には早急な対応を強く要請しているところです。

植樹作業点描

植え付け

現地のスタッフ達

用意された苗

植樹地の測量

苗木を運ぶ

1月のオトカ前旗　植樹予定地全景

私と環境(34) 庭木の健康診断 ㉕

庭木の手入れ ≪つる植物≫

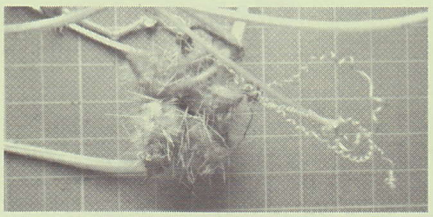
樹木環境研究会「ミルフィーユの会」
天 野 孝 之

前回に続き「つる植物」の話です。

4) アレチウリ(ウリ科 Sicyos angulatus)
：境栽木－低木

特定外来生物に指定されている１年生つる植物です。特定外来生物とは、「海外起源の外来種であって、生態系・人の生命・身体・農林水産業へ被害を及ぼすもの、または及ぼすおそれがあるもの」と環境省が定義しています。飼育・栽培・保管・運搬・販売・譲渡・輸入・野外に放つことが原則禁止されています。外来生物法により特定外来生物の輸入や取扱を規制することで、被害防止をはかっています。アレチウリ以外にオオキンケイソウ、ミズヒマワリ、ボタンウキグサなど身近な植物も含まれています。

アレチウリは、長い巻きひげで樹木に絡まりつきますが、高いところまでは登りません。１年生草本のため、地上部の開花結実を防ぐことで、翌年からの発生を防げます。液果表面は、柔らかい棘と毛で覆われています。



写真：柔らかい棘と毛で覆われた液果と
３－４本に分かれた長い巻きひげ

5) イタビカズラ(クワ科 Ficus nipponica)
：境栽木－低木

樹木以外石垣や崖にもよく登攀します。枝はよく分かれ、枝から付着根を出して登っていきます。茎を持って引っ張ると付着根が外れ、除去は簡単ですが、根系が残るため完全駆除は難しいつる植物です。太い根茎を見つけたら、茎に木針状に加工された除草剤（商品名：ケイピンエース）の施用が簡単で効果的です。よく似たのに、オオイタビとヒメイタビがあります。枝がつる状になって樹木に絡まり、気根を出して、樹木の幹枝を登る点は、同じですが、葉の形状が少し異なります。オオイタビは、葉がハート型になり、栽培品種がプミラとして出回っています。

写真：イタビカズラ

6) イワガラミ（アジサイ科 Schizophragma hydrangeoides）
：境栽木－高木

高木の株元から付着根で這い登り、梢端まで覆いつくします。名前の通り、岩に絡まり登っていきます。ツルアジサイとよく似ていますが、飾花の額片が１枚と少ないので、区別できます。

（写真１　アオツヅラフジ）

7) カラスウリ(ウリ科 Trichosanthes cucumerioides)：**境栽木－中木多年草**

巻きひげで樹木に絡まり伸びていきます。巻きひげは途中で巻き方が反転することがあります。除去は比較的容易ですが、地下に塊根が残り、毎年出てきます。太い根茎を見つけ、株元に木針状に加工された除草剤を差し込みます。カラスウリの花は、特徴的な形状をしています。しかし夜中に咲き始め、日が昇るころには花が終わってしまうため、あまり見る機会がないかもしれません。レースのように繊細なカラスウリの花は、とても神秘的な美しさがあります。また実はツヤがあり、真っ赤な色をしているのでおいしそうに見えますが、苦味が強く食べることはできません。カラスウリによく似たキカラスウリもあります。これは実が黄色になります。

写真：ウバメガシの垣根に登り始めた
カラスウリ

****

絵本からのメッセージ32

「ブタヤマさんたらブタヤマさん」

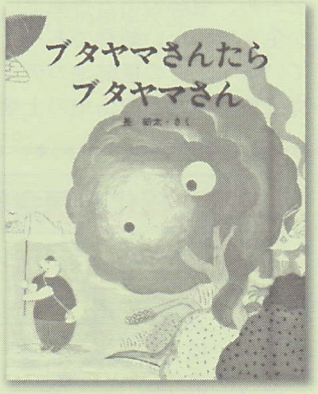
畑 中 弘 子（児童文学者）

コロナ禍で思ってもみなかった長い自粛生活を過ごすことになりました。このような時、思わず笑ってしまう「長新太」作の人気絵本「ブタヤマさんたらブタヤマさん」を読んで、ほっと一息ついてみてはいかがでしょう。

ブタヤマさんはチョウを夢中で追っています。後から何がやってきても分かりません。三つ目のおばけ、おしっこをかけるセミ、しっぽをかじろうとしているねずみ、巨大なバッタ、海からはいあがるでっかいイカなどなど……、後ろに何がきても、どうしていても、ブタヤマさんは全く気がつきません。

やっと、「ブタヤマさんたらブタヤマさん」と自分を呼ぶ声に気付き、「なあに、どうしたの」と言って振り返ります。その時には、おばけもセミもでっかいねずみもバッタもイカたちも、もう誰もいませんでした！

繰り返しの言葉や奇想天外な絵が続き、何度も読んでみたくなるユーモラスな楽しい絵本です。



さく：長　新太
（文研出版）

歴史の中の人と植物

「クリ」を食料・建築材と活用していた縄文人

小川良太
（会員）

今年６月初旬神戸市住吉山手の植樹地を半年ぶりに訪れましたが、毎年見られる白い栗の花が見られませんでした。昨秋も実がならなかったのですが、これも異常気象の影響でしょうか。現在は嗜好品として食されているクリですが、日本では縄文時代前期（約6000年前）には、主要な食料として利用されていたことが最近の研究で判ってきました。

1994年青森県三内丸山遺跡の発見が、大きな驚きを持って報道されました。この丘陵上の遺跡は、縄文時代前期から中期までの約1500年間、人々の生活の場となっていました。その広さは推定35haにも及び、住居跡・墓・倉庫・ゴミ捨て場など多彩です。遺構の中で注目されたのは、4.2m間隔で２列に並ぶ掘立柱跡です。柱跡は６基ありそれぞれ直径・深さ共に２mあります。底には直径１m近いクリ材の柱根が残っていました。この柱材の表面には腐食を防ぐための焼き焦がし跡が見られました。６本の柱は内側に約２度の傾きがあり現代の建築で「内転(ウチコロビ)」と呼ばれる手法が用いられていることも判明しました。また近くには32m×9.8mの大型竪穴式住居跡も発見されています。これらの遺構・建築手法などはそれまでの縄文時代のイメージを覆す発見でした。

遺跡からはクリを初めクルミなどの堅果類の殻、その他エゴマ・ヒョウタン・ゴボウ・マメといった栽培されていたと思しき植物も出土しています。当時の植生をしるために遺跡の土壌中に堆積している花粉の変遷を分析すると、遺跡に人が居住し始めるとクリ花粉が急激に増えて、それまでのナラ林からクリ林に変化することが判明しました。そして中期に集落が廃絶すると直ぐにクリ花粉は減少し、ナラ・トチノキの林に置き換わっています。クリの花粉は多いときには80%を占め、遺跡のある台地上はほぼクリしか生えていない純林であったと推測されています。この遺跡地のデーター結果を青森県内の八甲田山地の土壌花粉と比較すると、三内丸山遺跡に集落が営まれていた期間には花粉の組成が変動しておらず、ブナやナラの林が存続していたことが判明しました。こうしてクリ林と縄文人の係わり合いが垣間見えてきました。この遺跡では人々は集落を構えると、その周辺にクリが多い林を作り上記のエゴマ他の１年生の植物を栽培していたと想像されます。クリは陽樹といわれ豊富な太陽光を好みますので、実の収量を上げるためには他の高木の樹種は刈り払われていたことが推測されます。しかし、縄文人とクリ林の育成・管理・維持の、具体的な技術などはまだ明らかではありません。そしてクリのＤＮＡ解析の結果、三内丸山遺跡のクリは栽培種と判定されています。

縄文時代の食糧としては、クリ・クルミ・ドングリ類といった木の実(堅果類)が重要な資源であったことは推測されていましたが、近年は研究が進みその実相が徐々に明らかにされてきました。堅果類の利用は、１万年以上に渡る縄文時代の中では変化があり、地域性による違いもあります。

東北・関東・北陸地域の縄文時代の全時期を通じて様々な遺跡から出土するのは、ドングリ類とクルミです。各地の遺跡で「かご」や貯蔵欠に入ったドングリ類が発見されますが、多量に利用された痕跡は少ないようです。一方、大量の殻を廃棄したクルミ塚・クリ塚は発見されています。クリは縄文時代前期以降になると多く利用されるようになります。縄文時代後期になるとアク抜きの必要なトチの実の出土例が多くなり、その食料としての重要性が増したようです。トチの実を食べるにはアク抜きと煮沸が必要となります。そのための低地に水さらしのための施設―水場遺構と呼ばれる木組みや、煮沸したと考えられる大型土器、殻のみを集中的に廃棄したトチ塚の出土例が増加します。クリの実は縄文時代全般としては早期・前期は小さな個体が多く、時代が下るにつれて大きくなる傾向があります。中期になると現在の栽培種に近い４～５㎝ぐらいの実がでてきます。この傾向はオニグルミでも認められます。こうしたことから、縄文人は大きな実をつける個体を選抜して管理していたことも充分考えられています。

西日本の縄文人はドングリ類、なかでもイチイガシを多く利用しています。イチイガシはアクが無く、生でも食べられる利便性が魅力だったのでしょうか。クルミ・トチの実・クリの利用も認められますが、東日本ほどでは無いようです。この堅果類の利用の地域性の違いは東・西日本の植生の違いによるものかと考えられます。イチイガシは西日本に分布する常緑広葉樹です。中部地方の山岳部から北海道南部にかけての東日本は、ブナ・ミズナラを主とする落葉広葉樹林帯です。

建築材としてのクリは、水に強く・加工のし易い期のアク抜きの水場遺構では多く利用されています。その材の特性を好く理解していたようです。

三内丸山遺跡の６本柱の建築物は、現在望楼のように復元されていますが本来の姿・目的は不明です。縄文時代のこの様な巨木を用いた構築物（ウッドサークル・立柱等)は、なぜか日本海側の石川・新潟・富山・長野県の各地で発見されています。一部の遺跡では墓と共に構築されていますが、その意味は謎です。

現在、我々が巨木の立柱を目にするのは、諏訪大社の「御柱祭」です。人々の熱狂ぶり・信仰に、数千年前の人々がこれらの巨大構築物を建設した熱意に通底するものを感じるのは筆者だけでしょうか。

※三内丸山遺跡を含む「北海道・北東北の縄文遺跡群」をユネスコより世界文化遺産に登録することが７月27日発表されました。

連載「中国便り」は、執筆者の勤務のつごうにより今回は休載します。

会費・緑化支援金等協力者のお名前 （2021.1.1～2021.6.30 現在）

●前号で掲載できなかった会員も含まれています。
●順不同・敬称略

中井誠一	石　嘉成	江　洋龍	李　琛	矢野正行	宮島昭周	永倉弘一	神戸博愛病院
半田憲治	李　雲精	原　博司	金　啓功	池田雄二郎	西川鎮江	四方田文夫	
王　永発	麦　兆良	畠　宏一郎	林　同福	青山史眞子	樽岡千栄	堺屋和夫	
幸田悦麟	安本昭久	石　進通	陳　明徳	石　玉球	池田久仁子	塩田茂子	
谷川清隆	一木　仁	佐藤正子	阪井一命	呉　慶藝	池田　智	吉川政和	
福永久子	黄　禹生	村上鷹夫	竹本由美	楊　震雄	荘　天輝	三江会館	
王　華銀	譚　佐華	古川智理	馬　文璧	何　慧美	青木　明	中華会館	